北見工業大学研究報告　　Memoirs of the Kitami Institute of Technology
第22巻　第2号（平成3年）　　Vol. 22 No. 2 (1991)

初版と改訂版の間
—Herman Melville 著 *Typee*—

平野温美*

（平成2年9月28日受理）

Between the First Editions and the Revised

by Harumi HIRANO

A writer may well wish to put into the revised edition what he has in his first edition, and yet he may find his position not strong enough to ignore his publisher's intentions or wishes. What interests us most about the publication of Herman Melville's first book, *Typee*, is that although it turned out to be a success when published on both sides of the Atlantic in the spring of 1846, the American edition was put through a wholesale revision in July, which Melville himself carried out under duress, and a revised version, more correctly an expurgated edition, came out in August. There were 129 revisions and corrections in the revised American edition involving the deletions of some chapters, paragraphs or sentences, that accounted for more than the 30 pages by which this edition was shortened. Our concern here is to look over these emendations one by one and try to classify them into categories in order to clarify the most substantial of these excisions. Here we discuss the expurgated parts under the categories of political matters, missionaries, sexual matters, critical comments on civilization and the blissful Typee. From the fact that the revised version was widely accepted and Melville made this version standard, we can suppose the expurgations were the appropriate answer to the American popular opinion of the time. It is our purpose to see, by comparing the original ideas of Melville and the social norm, how far Melville was away from the main stream of American culture of the early half of 19th century, especially in the concept of civilization.

序

作家が処女作に自分の持てるものを出来るだけ表現し世に問いたいと願望するのは当然だろうが，無名であるがため出版社の意向と方針を無視するほど立場は強くないこともありうる。メルヴィルを世に出した作品『タイピー』の出版に関して最も興味をそそる事実は，イギリスでは John Murrey によって，アメリカでは Wiley & Putnam 社の手によってそれぞれ

* 北見工業大学一般教育等（人文）

1846年2月，3月と1カ月を隔てず初版が出されたが，好評だったのにもかかわらず同じ年の8月の始めにアメリカ側は大幅な削除と変更を施した改訂版を出版し，それが以後アメリカ国内で定本になったことである。その後，削除された部分がある程度復活したStedman版をアメリカの読者が目にすることができたのは46年後の1892年，メルヴィルが亡くなった翌年のことである。削除および変更された部分をすべて取り戻し，その上イギリス版，アメリカ版の初版，改訂版等を比較，検討の上メルヴィルの最初の意図に最も近いテキストとして編纂されたのがNorthwestern University Press and The Newberry Library版[1]である。これが1968年であることを考えると，作品が書かれて一世紀以上隔てて初めてメルヴィルの肉声が蘇った感動がある。

問題はその削除，変更された部分の内容とそれに因ってもたらされた作品の変質である。この小論の目的はNN版に附された，両国の初版本とアメリカ改訂版との相違点を明示した資料を参考にして，メルヴィルの最初の意図から，数カ月後の改訂版の間に取り除かれたものを摘出し検討してみることにある。第I章ではイギリス版からアメリカ初版を通して改訂版に至るまでの変更の跡づけと，変更内容の傾向，特色を摘出する。第II章とIII章では主として削除された女性に関する叙述を分析することで改訂の背後にある考え方を探ってみる。そうすることで，メルヴィル自身と彼を取り巻くアメリカ社会の距離をさぐってみることができるのではないかと思うからだ。

I

イギリス版はメルヴィルの原稿に最も近いが，それとアメリカ版初版の相違点は392箇所。多くはアメリカとイギリスでの綴り方の慣習の違いであったり（例えば動詞の語尾-ourはアメリカ語法である-orに直され，それは224箇所となる[2]），編集者Wiley側の読み間違いや，文章を良くしようとする企てによる変更である。問題になるのはそれにとどまらない他のいくつかの改訂で，中で最も大きな変化は次の3箇所，4文の削除である。

(1) What a sight for us batchelor sailors! how avoid so dire a temptation? For who could think of tumbling these artless creatures over-board, when they had swam miles to welcome us? (15.8–10)

(2) Not the feeblest barrier was interposed between the unholy passions of the crew and their unlimited gratification. (15.29–30)

(3) In good sooth, they so sway their floating forms, arch their necks, toss aloft their naked arms, and glide, and swim, and whirl, that it was almost too much for a quiet, sober-minded, modest young man like myself. (152.18–21)

そのほか別の表現に書き直されたものに次のようなものがある。アンダーラインの部分が変更の対象である。

(4) The gentle dame was not sufficiently evangelised to endure this→could not (7.2–3)

(5) ...royal lady, eager to display the hieroglyphics on her own sweet form, bent forward for a moment, and turning round, threw up the skirts of her mantle, and revealed a sight from which the aghast Frenchmen retreated precipitately,→bent eagerly forward to display the hieroglyphics on her own sweet from, and... (8.22–24)

(6) indolent Romans→ancient (150.12)

(7) ripe bananas→white (167.16)

(8) absence of the marriage tie→looseness (193.3)

(9) There is something decidedly wrong in the practical operations of the Sandwich Islands Mission.→apparently (198.13)

以上の例を見ると編集者 Wiley の意図は明瞭である。まず第一に，性の解放的慣習を示唆する描写を削除の対象としていること。第二は宣教活動をやゆし，批判した言辞である。これらの点がアメリカの読者の反応を正確に予感したものであることは，出版直後の書評にあらわれた批判，特に教会関係からの批評でも明らかとなる。

アメリカ版初版と改訂版の間は更に隔たった。Wiley は全体で 129 箇所の改訂を行ない，そのうち削除は 59 箇所にもなる。削除のなかで，1 頁全体から 1 章全体に及ぶものは 9 箇所，1 文から 1 頁以下までのものは 18 箇所，数語のものは 32 箇所となっている。削除したあとに追加した短い文や，表現の訂正が 20 箇所。その他は名詞，代名詞，形容詞の訂正や書換えである。しかしさまざまな外圧の下で行われた改訂であったとしても，少なくともこれはメルヴィル自身が目を通して出来上ったことには間違いない。そこで改訂箇所のうちから確実にメルヴィルの選択による変更のみを取り出すに当り，NN 版の編者は次のように規定した。

> If a revision or omission serves to soften the commentary on missionaries or political and sexual matters, it can be regarded as an example of Melville's "judicious" revising under duress, and the amount of resetting involved is irrelevant. ("Note on the Text," in *Typee*, p, 317)

外圧による削除，書き直しの項目を，NN 版は大きく，宣教，政治，性に関する事柄の 3 点にまとめてある。そのところをここではもっと詳細に検討して，書直しによる作品の根本の変質を探ってみたいと思うのである。

NN 版はイギリス版を copy text として編集された。イギリス版と NN 版の違いは -our/-or の違いを除けば 41 箇所の accidentals，そして 43 箇所の substantives である。しかしそれらは作品の意味あいを変えるようなものではなく，誤字や誤植の訂正を通してよりメルヴィルに近ずけたものであるから，NN 版とイギリス版はほぼ重なると見なしても間違いではないだろう。NN 版の巻末には編者の手による List of Substantive Variants が掲載されている。

メルヴィルが生存中に出されたもののうち，作者の認可を得て出版されたいくつかの版の間の語の相違点がこれによって比較することが出来るし，またイギリス版またはNN版を中心にしてアメリカ版改訂版ではどのように変化したかも見る事ができる。そこにはTHE STORY OF TOBYを別にすると282箇所が表示されているが，中から例えば，Mountain→Mountains, modes→mode, those→these，といった重大な意味変化をもたらさない単語もしくは数語の表現の変化を取り除き，表現，内容の実質的な変更を促すアメリカ改訂版の削除箇所や語句の書き直しを，84箇所取り出してみた[3]。このうちには，例えばNakedをLovelyに直すような1語の変化もあれば，第3章のように最初の1行を残して章全体を削除したものも含まれる。これら84箇所の削除，変更箇所の内容を次のように分類してみた。

政治言及	18 (8)
教会批判	12 (6)
性的表現	22 (2)
文明批判	20 (6)
タイピー賛美	17 (2)
その他	33 (4)

数字の中には目次や章の見出しの項目も含まれている。括弧内の数字はその数を示す。総数が多いのは1箇所が複数の項目にわたることがあるからである。「その他」の項目に入れたものは作品の語り口の調子を変えるような1ないし数語の削除や言い替えが主で，例えばAffectionatelyをGratefullyに，infernalを削除，misgivingsをmusingsに，inmatesをnativesに，またI made a dressをA dress was madeに，indolentをancientに，lassesをgerlsに，ripeをwhiteに，Typeeanをtropicalに，theyをnativesに，“Home” and “Mother”のうち“Mother”の削除，Fayawayの泣き方をindignantlyからconvulsivelyにといったものが21ある。あとは船の乗客に言及した箇所，ポーター，スチュアートの本，島の宗教，人口整調，言語の難解さ，そしてクック船長の足の行方，他の島との比較，文献等に関する叙述の削除となっている。

つけ加えておかねばならないが，この項目別の数による比較は1語の変更も数頁にわたる削除も同じように数えているという意味において，正確に事実を反映しているとは言い難い。この項目別表示で確かに判明するのは，削除，変更の傾向と特質ということになろう。以上の前提の上で次に中心となる問題点は，「その他」以外の項目の削除の内容を検討することによって，これら分類された項目が互いにどのように関連しているのか，また削除はどのような考えと主張から因って来るのか，背景にあるものは何なのかを探ってみることである。

II

作中の一切の政治言及は削除された。その削除箇所の内容は4点にまとめられる。第一に，フランスによるマルケサス諸島の占有政策の批判。第二は同じ南海の島でもタイピーのある Nukuheva 島が理想的なのに比べ，ハワイの政治が俗悪なことの批判。第三はアメリカ合衆国フリゲート艦エセックス号のポーター船長によるタイピー侵入批判。第四は全文4頁に及ぶ削除となった Appendix の内容となるが，南海の島の政策に関してメルヴィルが一貫してアメリカを非難し，イギリスをひいきした点。以上である。読者はこれらから当時の列強3国が南海の島々で繰り広げた占有地拡大競争を目の辺りにすることが出来る。そしてメルヴィルの視点はイギリスびいきを別にすると終始列強諸国の南海の島々への侵入を弾劾する立場である。

次は，教会，宣教師批判，性的表現，文明批判，タイピー賛美であるが，重要なことはそれらがそれぞれ別個のものではなく，互いに緊密に絡み合う事項であることだろう。例えば，第1章で削除された2頁 (6.18–8.16) には二人の女性の逸話が語られるが，これを取り上げてみよう。ひとりは夫の宣教活動の手段として，島人が今まで白人女性を見たことのないのを利用し，あたかも自分が神聖なるもののように装って島へ出かける宣教師の妻である。夫と共に島に渡った彼女は期待に反し好奇心に満ちた島人によって着ていたものをはぎ取られ，人間の女性であることを見破られた上，怒った島民から侮辱を浴びせかけられてしまう。このような仕打ちに耐える程には「福音に満ちていなかった」妻は夫をせかして島を離れてしまったという話。もうひとりの女性は島の女王である。彼女はアメリカ艦隊への公式訪問の場面において，居並ぶフランス士官，アメリカ艦隊の提督，乗り込み員一同の衆目する中，自分の身体に刻み込まれた自慢の入墨を見せたくてフランスのお仕着せの上着をたくし上げ肉体をあらわにし，公式訪問をぶち壊してしまった話である。

これらの逸話は大幅な削除の最初に当たり，以後の削除の内容をある意味で集約していると思われる。ここには野蛮世界と文明世界の対比，布教活動批判，性に関する表現がすべて含まれている。しかしこれが単なる表現の問題でないのはもちろんで，メルヴィルは第一章を書くときからたぶん無意識のうちに，ふたつの世界の根幹の違いは女性の性の違いで言い表すことが出来る事を感じ取ったのではないかと推測される。言ってみれば，それらはさまざまな装飾とそして欺まんの「ひだ」の中に隠された性と，お仕着せのそれらをはぎ取り，誇り高く露わに示す性の違いである。欺まんの「ひだ」が神聖なものを包み隠しているかのように見せかけて島にやって来た宣教師に，メルヴィルは南海でのキリスト教宣教の本質を見ていたのもまちがいない。二人の女性を描く中に，対照する二つの世界の違い，その間を結ぶ宣教活動の特質が絡み合って提示される。だがこれら二つの逸話が後出の率直な表現と違って読者の深刻な思いを引き起こすものでないのは，一方は欺まんが欺まんとして見破られたこと，片方はあらわな性のくったくの無さによる。けれども読者がこれらの逸話にメルヴィルが文明をやゆし，

宣教活動を痛烈に皮肉り，野蛮な島に強く惹かれていることを読み取ることは容易である。初版では穏やかな書換えのみ ((4) 及び (5)) 行った John Wiley だったが，改訂版では逸話すべてを削除してしまった。

メルヴィルの南海の女性の叙述はその露わな明るさが第一の特徴である。島の女性たちは，出会う前から裸体 (Naked) として思い描かれた (Wiley はこれを Lovely と変える)。出会った後では彼は島の男女の身体の美しさを賛美する。彼らの皮膚の色，艶，姿を詳細に述べ，中で何人かは「例えば異邦人のマーアヌーのように，あらゆる点で美そのもの」(184) であることを目撃したことを述べるに当り比較的最近の文献を引合いにして確認するが，それも削除される。次にメルヴィルがタイピー女性を描くとき伝わってくるのは，(もちろんここも削除されたが) 明瞭な官能的な響きである。女性たちが身体をくねらせて踊る姿を見つめながら彼がもらした感想 ((3)) はアメリカ版初版から既に取り除かれてしまったことは指摘した通りである。

紀行文としての『タイピー』の面白さということならば，文明社会の「ひだ」のなかに隠された性とはまるで異なる，上品ぶることの必要の無い，抑圧やくったくも殆ど不在の女性たちに取り巻かれた場合の作者の対応こそ興味を引くところかもしれない。しかしメルヴィルの作品の中の意図は残念ながらそこにはない。美しい肉体，女性たちの持つ官能的なまでの感性の世界は，実は風景全体と一体となって読者に与えられているところのものであることを理解しなければならない。船が島に近づいたとき，初めて遠くから認めた女性たちは南海の自然と混然とした存在であったことをここで思い出すことが必要である。

> We had approached within a mile and a half perhaps of the foot of the bay, when some of the islanders, who by this time had managed to scramble aboard of us at the risk of swamping their canoes, directed our attention to a singular commotion in the water ahead of the vessel. At first I imagined it to be produced by a shoal of fish sporting on the surface, but our savage friends assured us that it was caused by a shoal of "whihenies" (young girls), who in this manner were coming off from the shore to welcome us. As they drew nearer, and I watched the rising and sinking of their forms, and beheld the uplifted right arm bearing above the water the girdle of tappa, and their long dark hair trailing beside them as they swam, I almost fancied they could be nothing else than so many mermaids: —and very like mermaids they behaved too. (14)

初めて目撃する女性たちが半ば自然から生まれたばかりの存在であることについてのこの描写は削除されてはいない。しかし一方作中の主人公が長い航海の後，やっと島に上陸した瞬間の感激を語るところは船と島の対比，更には文明社会と野蛮社会の対比を示す接点ともいえるが，なぜか Wiley はここを削除してしまった。上陸直後に飛び込んだ木立の日陰のすがすがしさを主人公が「新しい自然成分の中で漂っているかのように感じた」(I felt as if floating in

some new elements) (28) ところである。この文章は前後併せて4頁以上にわたる削除の中程になるが，削除の理由は前後との関係が主であると思われる。ここは三章（全部削除）に引続き文明国の島への侵入，およびそれがもたらした暴力が弾劾され，その上，フランス提督と島の老酋長との会見から，主人公が始めて二つの世界を並べて評価するくだりがある。「新しい自然成分」はこういった叙述の中では単にすがすがしさが強調されるにとどまらず，島は既知の要素や成分で測り，それによって支配し，変化させるとこではないことをメルヴィルが「新しい自然成分」と言う言葉に託したことがわかるのである。

官能的な島の女性たちはこの「新しい自然成分」の脈略のなかの存在である。それは島の豊かな自然と一体のものとしてメルヴィルが捉えていることは重要であろう。いうなれば島の女性たちの性は堕落以前のイヴである。恥ずかしさを感ずることなくイヴたちは裸体を見せる。ここから『タイピー』は一種の変身の物語であることに気づくのである。主人公は堕落した世界から彼岸の地ともいうべき楽園へ赴き，みずから堕落以前のアダムとなるという物語である。従って，メルヴィルが描く島の女性たちの性に淫濫さがないのは，主人公自身が「新しい自然成分」の中に島の女性たちを鑑賞したから淫乱と見なかったからである。メルヴィルが目撃した淫乱な光景とは，それは文明国から来た白人の船乗りたちと島の女性たちとの出会いの場面であろう。船が島へ近づくと娘たちは一斉に数マイルの距離を泳いでやって来る。彼女らが乗船して身づくろいした後，次のような光景が展開される。

Thus arrayed they no longer hesitated, but flung themselves lightly over the bulwarks, and were quickly frolicking about the decks. Many of them went forward, perching upon the head-rails or running out upon the bowsprit, while others seated themselves upon the taffrail, or reclined at full length upon the boat. What a sight for us batchelor sailors! how avoid so dire a temptation? For who could think of tumbling these artless creatures over-board, when they had swam miles to welcome us?

Their appearance perfectly amazed me; their extreme youth, the light clear brown of their complexions, their delicate features, and inexpressibly graceful figures, their softly moulded limbs, and free unstudied action, seemed as strange as beautiful.

The 'Dolly' was fairly captured; and never I will say was vessel carried before by such a dashing and irresistible party of boarders! The ship taken, we could not do otherwise than yield ourselves prisoners, and for the whole period that she remained in the bay, the 'Dolly,' as well as her crew, were completely in the hands of the mermaids.

In the evening after we had come to an anchor the deck was illuminated with lanterns, and this picturesque band of sylphs, tricked out with flowers, and dressed in robes of variegated tappa, got up a ball in great style. These females are

passionately fond of dancing, and in the wild grace and spirit of their style excel everything that I have ever seen. The varied dances of the Marquesan girls are beautiful in the extreme, but there is an abandoned voluptuousness in their character which I dare not attempt to describe.

Our ship was now wholly given up to every species of riot and debauchery. Not the feeblest barrier was interposed between the unholy passions of the crew and their unlimited gratification. The grossest licentiousness and the most shameful inebriety prevailed, with occasional and but short-lived interruptions, through the whole period of her stay. Alas for the poor savages when exposed to the influence of these polluting examples! Unsophisticated and confiding, they are easily led into every vice, and humanity weeps over the ruin thus remorselessly inflicted upon them by their European civilizers. Thrice happy are they who, inhabiting some yet undiscovered island in the midst of the ocean, have never been brought into contaminating contact with white man. (アンダーラインは削除箇所, 15)

T. Walter Herbert が *Marquesan Encounters* の中で分析しているように，メルヴィルの書き方は，船上で繰り広げられる放蕩と好色の風景を非難するように見えながら，その実はその光景を再現してみせるのが目的である。「あえて書くことはしない」の否定的言辞の効力は反対に強力に光景を喚起させることにあるからだ。すなわち「メルヴィルは遠回し的な言い方を禁じられたエロティックな光景を隠すためではなく示唆するために利用した[4]」のである。

しかしこの書き方の特徴は別の角度から分析することもできるのではなかろうか。引用の最初から最後に至るまでの彼の描き方には，途中微妙なずれがあるのがわかる。それは娘たちを第三者の立場から見つめて描こうとする視点と，「われら独身の船乗り」の立場からのそれの混在によるずれである。この視点のずれは時間のずれから生じたものであると説明することも可能であろう。「われら独身の船乗り」は当時のメルヴィルの目であり，第三者の目とはたぶんに数年後の執筆時におけるメルヴィルのもっと広い枠組みの中で見つめなおした視点であるという意味である。第三者の目による娘たちの姿と行為には自然あるいはここでは海から出てきたばかりの，半自然，半人間といってよい存在としての特徴がある。気どりや見栄といった技巧のない自由な明るい振舞い，この世の存在とも思えない人魚の様な彼女らを描いていくうち，視点は「われら独身の船乗り」へ移行する。すると自然から出てきたばかりの娘たちは一挙に男たちの欲望の対象と化してゆく。彼女らの振舞いのことごとくはエロティックな要素を帯びてゆく。Wiley がこの変化を誘発する箇所を削除した理由はそこにあるのではなかろうか。その後の「禁じられた光景」を描くメルヴィルにはこの両者の視点が同時である。一方で性の興奮の高まりを確実に示唆し，片方でそれを非難する書き方には作者自身の二つの体験が語られていることを読者は読むことになる。Wiely によってなされた二番目の削除文がそれに該当する。興奮が高まりを極めたことを読者に知らせた後に続く最終部分はもちろん第三者の

視点であるが，あからさまに描くことは「禁じられた光景」であったとしても，それは明らかに南海の島で繰り返された現実のある行為で，それが人類の歴史における深い悲劇を物語る代理となっていることを伝えるのがメルヴィルの意図と思われる。熟慮することもなく行われた娘たちと船乗りたちとの行為は，「哀れな野蛮人」と「彼らを教化するヨーロッパ人」の基本的関係の比喩であることを彼はここに示すからだ。両者の出会いは「汚染の接触」であり，それは言葉を代えると自然を犯し，破壊する行為そのものであること，そして文明とは堕落を意味することをメルヴィルはその後作品と通じて展開することになる。削除版の意図はそのメルヴィルの主張を出来るだけ排除することであった。

文明社会からやってきた男たちの島の女性たちに対する行為がメルヴィルを嘆かしめたのは以上の例が示すようにそこに文明社会の野蛮に対する暴力的破壊行為が象徴的に現れるからである。白人男性との接触は，本来の性とは反対の結果，すなわち南海の島の人口を激減することになることのその経過をメルヴィルは繰り返し義憤をこめて述べるが，もちろん改訂版ではその様な言及は削除の対象となった。すなわち野蛮と文明の関係を「無垢」と「堕落」の図式のうちに捉え，その具体的事実の展開をメルヴィルが怒りをこめて語るところは以後次々と削除されることになったのである。また性を匂わす表現として削除されたなかにはタイピーの一婦多夫という珍しい結婚制度が含まれていることから見て，Wiley の削除版は今の読者にとって，当時の西洋諸国と島の関係を含め紀行文としての面白さをはぎ取ってしまったといえる。が，まさにそこに逆に照らし出されるのは，メルヴィルと彼の時代との葛藤のドラマである。彼は言いたいことが言えなかった時代に言ってはならないことを言ったのである。当時のアメリカ社会の抱いていた文明の意味が，削除された所から隙間見えてくる。

III

白人男性の島の女性に対する関係は，そのまま西洋社会の島の経済および文化の体制の破壊と一般である。かくしてメルヴィルの激しい西洋文明批判が以後深まって行く。最初は着飾ったフランス国提督と裸の老酋長を比べ，その幸福度を計っていただけの主人公であったが，次第に制度化してゆく文明社会の野蛮世界の奪略行為に目をむけてゆく。4頁以上にわたって削除された26章の後半 (195.1–199.8) は，キリスト教布教から始まる文明がもたらすさまざまな害悪，そして島の経済の根底からの破壊，幸福なる人々が一転し哀れな人々となる経過，そしてそれは同時に，キリスト教文明社会にとって勝利と評価される出来事となる顛末が語られるところである。

メルヴィルの文明批判は，タイピー社会の賛美と裏表の関係である。例えば「タイピーの社会的状況と一般の性格」と題する二十七章で「谷はすべての事柄が調和と円滑さで取り行われる。あえて言わせてもらうとキリスト教徒のうちで最も選り優れ，洗練された敬けんな人々の集団さえここと肩を並べることが出来ない。」(200) と言うとき，メルヴィルがタイピー社会

の経済，政治の面での平等を強調するのはもちろん，主として優れた人間性，道徳の高さを，不平等そのほかの諸悪に満ちた文明社会と比較するためであることは明かである。また「マルケサスの人々が互いに接する時に示す誠実さの起因するところは，内在し，あまねく浸透した『義なるもの』『高貴なるもの』の概念である」(201) と彼らを絶賛する時，それはあらゆる意味で人が人間に対して抱く理想そのものである。Wiley の削除はこういった文明社会の悪を際だたせるようなタイピー賛美が対象となったが，理由のひとつは多分にメルヴィルの描くタイピーが，「楽園」と言う言葉が適当であることからも，現実と言うよりむしろ象徴のレヴェルにあるからだろう。メルヴィルは決してタイピーについて深い知識を持ってはいなかった事実は，Charles Anderson の教えるところでもあるが[5]，彼が彼らの言葉に無知であったこと，通訳もいなかったこと，従って伝承神話に無知だったこと，社会の基本的な制度であるタブーも殆んど理解していなかったことは，メルヴィル自身認めている事実である。よってメルヴィルがタイピーには法律もなく，個人の土地所有らしきものもなく，労働も殆ど皆無の上，病人も死者もさらに墓場も見あたらないと書くとき，読者がそこが文明社会の彼岸の地であることを知る。

メルヴィルが読者に与える最大のアイロニイは，南海の島を楽園と見立てた場合，無垢なる楽園の住民を失楽へと先導するものが，他でもなくキリスト教宣教師であったことではないだろうか。彼は宣教の理想の概念と，現実の布教活動の隔離を次のように述べる。

> ...against the cause of missions in the abstract no Christian can possibly be opposed: it is in truth a just and holy cause. But if the great end proposed by it be spiritual, the agency employed to accomplish that end is purely earthly... (197)

ここにはキリスト教の教える「精神的」な理想の概念は未だ福音の光が届いていない南海の邪教徒の間でこそ実現していることの痛烈なアイロニイが込められているのはもちろんであるが，そうであるなら，はからずもタイピーは作中において作者の意識の「精神的」なるものを映し出したということが言えよう。布教活動には「決定的な誤り」があるという結論にメルヴィルが達することになるのは教会の活動は現地では現実の文明社会の仕組みと一体であることを見るからである。しかしメルヴィルがふたつの世界を比較し，宣教活動について次のように述べるとき，彼の時代と社会に対する彼の批判精神の位置が正確に伝わって来る。

> The term "Savage" is, I conceive, often misapplied, and indeed when I consider the vices, cruelties, and enormities of every kind that spring up in the tainted atmosphere of a feverish civilization, I am inclined to think that so far as the relative wickedness of the parties is concerned, four or five Marquesan Islanders sent to the United States as Missionaries might be as useful as an equal number of Americans despatched to the Islands in a similar capacity. (125–26)

タイピーを神話のレベルで語りながら，二つの世界をこのような現実の文化のレベルで比較することに，メルヴィルの文明社会への挑戦とも言える響きがある。当然ながらこの箇所は削除されたが，この挑戦を敏感に受け止めたのが他でもない宗教関係者だったことはよく理解出来る。教会関係者にとってはメルヴィルは異端者というよりむしろ異教徒と呼びたい存在であったらしいことは，初版が出てからの書評から窺うことが出来る。William Oland Bourne は『タイピー』を酷評した文章を *Christian Parlor Magazine* に載せ，メルヴィルは「読者の幸福への類なき献身のため，読者をタイピー教に改宗すべく自分の幸福を犠牲にして」タイピー谷からやってきたのだと攻撃した[6]。こういった批判は一部の関係者であったものの，Wiley が削除を強いたのは一般的な時代の背景を意識してのことはもちろんである。野蛮を「無垢」なるもの，文明を「堕落」したものという考えはルソーを経たヨーロッパでは取り立てて憤慨することもなかったが，アメリカという文明社会は同日ではなかったことが分かる。イギリスでは殆ど問題にならず，初版のまま再版を重ねたのだが，アメリカでは大幅な削除がおこなわれたことの違いはそのまま二つの国の文明の違いである。

結　び

メルヴィルが彼の時代に対しどのような立場にあったかはいままで指摘したいくつかの削除から知ることが出来る。端的にいえば当時のアメリカでは野蛮世界はキリスト教文明社会の観念的枠内の中で捉えられていた。Bourne の表現を借りると野蛮人はかろうじて人間（アダムの子）であったが「無知蒙昧，善悪の区別のつかない[7]」者たちでしかなかった。はたまた現地に赴いた宣教師にとっては自分たちとは異なる性風俗は「忌まわしい肉欲[8]」としか思えず，メルヴィルが「幸福の谷」と呼んだ地は彼らにとっては「サタンの領域[9]」であったのだ。この観点から眺めると，Wiley が削除の対象とした項目がうなずけるものとなる。そして同時にメルヴィル自身がどれだけキリスト教文明社会から離れていたかも計ることが出来る。すなわちメルヴィルは 19 世紀前半アメリカのキリスト教文明社会の外側に出て，それに対峙する，もうひとつのまったく異なる世界を現出させることで，自分の属する世界を見つめる視座を得たのである。タイピーは半ば標準化された象徴である。メルヴィルはその象徴を押し進め，独立したひとつの世界を創った。それは文明との対比によってのみ成立する象徴世界である。言い替えれば，文明と野蛮を人の社会の，または人間存在の隠喩としてメルヴィルは描いたことになろう。Wiley の削除や書換えは，まさにそこを消し去ることが目的であったのだ。7 月にメルヴィルは「改訂版序文」を書くが，その中で「この本の主たる興味はある驚くべき冒険の物語に存する故，改訂するに当たり，その冒険とまるで無関係なる箇所は不適切として削除した[10]。」と記している。確かに改訂版は口当たりの良い冒険物語としてまとまったが，皮肉にも「紀行文」と銘打って出版されたこの本の最も興味深い紀行文の箇所が削除される結果となった。さらに注目すべきは「冒険と無関係な箇所」にこそ，若き著者が見いだした島の女性の新

鮮なエロティシズムの世界，楽園の神話のレヴェルまで高められた理想的世界，そしてその視座から批判される文明世界の実態が生き生きと語られることである。19世紀前半のアメリカはなぜこういった叙述を排除したのか。それはアメリカ文明は野蛮世界を文明世界に対立する存在と見なすことを許さないものであったからであろう。アメリカ文明にとって野蛮世界とは変質すべき対象であって，その関係はソシュールの流れの言葉を使うと，メトニミックな関係である。メルヴィルはそれに対し果敢にメタフォリックな対立を行ったとでも言える。Wileyの削除版『タイピー』はわれわれにメルヴィルと彼の時代のアメリカ社会の関係を映し出してくれると同時に，紀行文としての『タイピー』の新たな意味を見いだす手がかりを提供してくれる。

注

1) 以後NN版と略す。以後引用はこの版から行い，頁数は括弧内に記す。
2) 数字の資料はNN版の Editorial Appendix に依る。
3) NN版の List of Substantive Variants に記されてあるものから選んだのは，次の頁及びラインの84箇所の改正である。vii. 4; ix. 4–5; ix. 11–15; ix. 18–20; x. 37–38; xi. 16–18; xi. 27; xi. 31–34; xii. 21; xiv. 12–26; 3.3–5; 3.15–22; 5.12; 6.4–10; 6.18–8.26; 15.8–10; 15.29–30; 16.2–7; 16.8–19.17; 20.5–7; 23.15–19; 25.35–29.35; 47.3; 88.6; 89.30–32; 89.32; 90.7; 110.30; 110.32–35; 123.3–5; 124.16–126.8; 126.9; 126.10; 126.11–12; 132.22–24; 133.28–29; 134.36; 150.12; 152.18–21; 152.23–24; 162.4; 165.25–26; 167.16; 169.2–4; 169.10–171.10; 179.7–16; 181.31–182.3; 183.28 n (183.34–39); 183.28–33; 184.1–19; 186.4–19; 188.2; 188.7–11; 188.13–189.14; 189.35–38; 189.14; 189.15; 189.15–18; 189.23–24; 189.25–28; 190.15–16; 190.19–21; 191.1–2; 191.9–15; 191.20; 192.7–18; 192.19; 192.29–193.9; 195.1–199.8; 200.3–201.10; 201.10; 201.27; 201.28–29; 201.29; 202.1; 202.5–7; 202.36–203.26; 210.8–11; 223.4; 225.3–8; 229.28–30; 234.9–38; 248.26–27; 250.26–27; 250.38–39; 254.1–258.34.
4) T. Walter Herbert, Jr., *Marquesan Encounters: Melville and the Meaning of Civilization* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1980), pp. 14–15.
5) Charles Roberts Anderson, *Melville in the South Seas* (New York: Columbia Univ. Press, 1939), pp. 117–195.
6) William Oland Bourne, "*Typee*: The Traducers of Missions," in *Christian Parlor Magazine* 3 (July 1846), rpt., in *Critical Essays on Herman Melville's* Typee, ed. Milton R. Stern (Boston: G. K. Hall & Co., 1982), p. 42. 尚，Bourne の島民に対する考え方については拙著「19世紀前半アメリカにおける南海の野蛮人」*Otuka Review* No. 25 (1989), pp. 75–87 に発表した。
7) Ibid., 39.
8) Herbert, p. 25.
9) Ibid., 66.
10) Jay Leyda, *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969), I, 233.